



細かい細工がある門の引き戸



白洲屋敷の長屋門 伊丹市東野に現存

戦後の宰相、吉田茂の懐刀としてサンフランシスコ講和条約締結などで活躍した白洲次郎の父で実業家の白洲文平が、大正時代初めに現在の伊丹市春日丘4丁目の小川医院北側付近に建てた別邸「白洲屋敷」の長屋門が同市東野5丁目、農園芸業久保貞雄さん方に移築され、現在も門として立派に機能していることがわかった。

白洲屋敷は、芦屋市に住んでいた文平が道楽で建築したもので、屋敷の全面積は約4万坪（13万2千平方メートル）あった。建築は、お抱えの宮大工が担当、屋敷内には美術館や広大なボタニ園をつくるなどぜいを尽くしたものだ。

だが、文平が昭和3年ごろに破産、その後人手に渡り、同10年代半ばには、伊丹市内で大阪栄養工業株式会社や栄養研究所を創設した八崎治三郎さんの所有となった。しかし、この八崎家も昭和30年代後半には、この屋敷を手放す結果になり、その後は順に分割、分譲されていた。

このとき、とくに門や玄関部分の材質や造りが見事だったことから「壊して捨てるのは惜しい」ということになり、伊丹市大鹿の林建設関係者らが再利用してくれる人を探し、門の移設を引き受けたのが久保さん方だった。また、玄関部分は京都の寺に引き取られたといわれている。

門は銘木「吉野杉」を使う 門の腰板は琵琶湖の舟の板

久保さんの話によると、昭和36年ごろ林建設会社関係者から移築話が持ち込まれた。門は日本の銘木として名高い「吉野杉」を使用した立派なもので、全横幅が約9メートル（5間）の瓦葺き。

ていたらしい。この門は西向きに建っており、門前は玉砂利敷きで、大水槽は門の向こう側に見えたという。

久保さんは「移築したとき、発動機が置いてあったというところは油まみれでした。門は一部傷んだところがありましたので補強しましたが、ほとんどはもとの材料を使って復元しました」と話している。

白洲屋敷の新しい所有者は 食品製造業の八崎治三郎さん

白洲屋敷の新しい所有者になった八崎治三郎さん（故人）は、食品製造の大阪栄養工業株式会社を昭和16年に伊丹市北河原に創設した人。同社は第2次世界大戦中は軍の協力工場としてパイロットの携行食なども製造していた。また、そのころ同市春日丘に大阪栄養研究所を設立した。長男が八崎圭之助さん。

そして移設工事は林建設に関係ある腕利きの棟梁のもとで行われた。

門の実際の出入口は約3・6メートル（2間）。門の腰部は琵琶湖で使っていた舟の板で茶色の釘の跡が残る。そして扉は真ん中から左右に開く「観音開き」ではなく両側に開く引き戸になっている。うえ、扉には立派な細工がほどこしてある。瓦は移設のとき番号をつけて運んで一枚一枚水で洗い、丁寧に葺いたため一日二列程度しかできなかったという。

発動機で井戸水を大水槽へ ほとんど原形を保つ門

そして出入り口の右側1・82メートル（1間）に格子の出窓があり、元は門番の部屋もあった。左側1・82メートル（1間）は、現在車庫になっているが、もともとは発動機つきのポンプ室。白洲邸では発動機で大貯水槽に井戸水を汲み上げ